

源氏物語講義

紅葉笑





紅葉賀
 此卷ハ後壹のとき哉旨
 とわられたるまじき
 まづ始に試樂をさせ
 させのふと成かきて
 帝の内寵愛のまじき
 なるまじきをあらはせ
 七月より後よまるとに
 てをもとめたり后
 ハ女の極位をれハ後
 壹の内寵の極なる
 致後ハ源とのことより
 世をうとみて、心こびし
 きささゆあるは、後よ尼
 となり、のふ伏案はし
 て、人世の榮枯あるは
 志めせるあり、

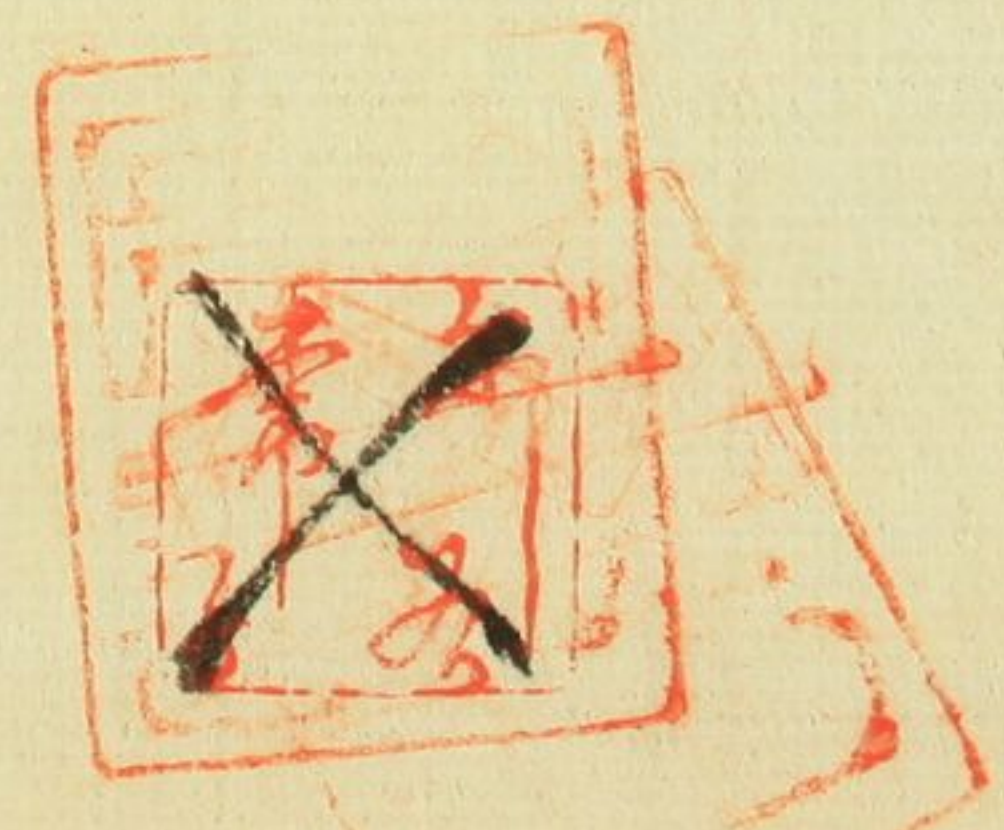
段落
 此卷ハ一大段五小段
 と、一小段は於てハ

源氏物語講義

紅葉のあ

紅葉賀の卷 九一大段五小段三十節

此卷ハ後壹のときを旨とわられたり。源氏十八歳
 の十月より十九歳に十月までのこと。卷の名を旧
 注どゆよりいへるべく。詞を以て名つけたるをまじ
 ざれど、昔中ハ紅葉賀とほゞききしる詞ハ、ついで
 一。一小段の才二節よ。この日かくつゝ、は、は、は、
 紅葉のあげやさうぐゝとあり。旧注云。花宴卷よ
 赤紅葉の賀とあり。又、後より、源のうらまは、此卷よ。朱雀院の
 紅葉賀まじきのふら、車おほし、おほるとあり。これこ
 世をとりありせて世の名とせり。志あのみとるゝは
 うつは、物語は、神泉苑よ、紅葉の賀まじき、め、は、は、
 とあり。又、後井の、お、よ、後、の花は、賀、は、は、
 賀といふ事あり。兼和は、内時、紅梅の賀、お、を、
 る事あり。これらの名目を倒とせしや。又云、賀と
 ハ、壬午の満ちたるを賀して。行末の宝篋を祈るん
 之。天皇の御賀ハ、仁明天皇。嘉祥二年三月。興福寺大
 法師等奉賀。天皇満四十。これを、め、なり。太上天
 皇の御賀ハ、淳和天皇。天長二年十一月。奉賀。太上天皇
 五八之御齡也。是始なりとあり。されば、此卷ハ、十月十日、



あはれそりいづべし
 眼目
 ひろきといふことおも
 全篇の眼目なることハ
 相違此巻は兼てさきより
 志めつれど、ば巻に
 も阿まゝあまを注
 してていづべしそを
 一小段の才一節つね
 よりもひろふと見え
 のし四小段の才一節
 おれしひろりよま
 おのへれたし、五小段の
 才七節別のひろりか
 がやきて、又月日のひ
 ろりのまよひをひた
 るやうよまをさきと見え
 たり、又此巻をさき巻
 の中との源と密通せ
 くと改いづく後悔あ

この日のげさやうよましたふよ。あぐのあま
 さり。ものゝおむろきねよ。おれど舞のあし
 ぶにおかちらよよんてぬさほるをいふるど
 のくふ。これや佛のほ迦陵嚧伽のしゑるらんと
 せゆ。おかしらく衣るるよ。みあどほおとらふ
 上達部。皇子。感泣。ひぬ祿をそ
 て袖うちをほし。あまよ。まちとりたるかく
 のよまぎつ。しきよ。うののをもあひまをうりて。伊
 ぬりもむらるとん色あまふ。まあかの女房が
 いかでたきよつけてふ。たぐならびおぼし。て。神

十九号六

のふよまよまをいふ
 たれをまづ一小段の
 才二節よまのこち
 なるしひひけし三小
 段の才三節よまのい
 づつし。同才一節よ
 人のゆれしひもさつら
 か。まを四小段の
 才一節よまのひま
 るし。同ふよあせも
 さうれて、五小段の才
 七節よまのこちと
 おほせし。さああるハ
 皆眼目。又はあの上の
 こそをかけるふ。よま
 のぬといふし。あを以
 て眼目とあたるやう
 へ。さきて注さし。てえ
 るべし。

とどそらよめてつづきあのちのたようそや。と
 ののふを。このまき。女房るどを。い。う。と。み。と
 いめたる。一小段の才一節。内裡の武楽。源氏
 の中ね。大との。中ね。と改めてかける。小掃補。よめ改めて
 あけ。おほやけの。く。より。稱。さ。と。い。れ。た。さ
 もあべ。○おほ海波。舞の名。○あ。の。う。の。深。山。木。是
 いめ。う。つ。ぬ。と。い。ふ。た。と。○。源。と。い。ふ。舞。の。う。ち
 よ。う。つ。ふ。る。○。迦。陵。嚧。伽。佛。の。説。妙。夢。を。説。く。る。あ。の
 よ。○。お。ち。と。り。た。さ。ぐ。し。源。終。り。て。袖。を。う。ち。て。改。ま。る。を
 合。圖。は。待。受。た。る。樂。人。ど。も。樂。を。奏。ひ。○。か。く。め。で。た。き。よ。つ。け。て
 中。弘。徽。殿。の。女。房。源。の。う。つ。く。く。お。を。し。ま。ひ。は。付。て。お。如。の。ふ。え
 相。つ。ば。れ。卷。の。思。存。○。神。ら。ど。そ。ら。よ。め。て。つ。づ。き。ま。い。これ。を
 容。顏。美。麗。な。る。人。ハ。神。よ。と。ら。ま。る。ど。い。ふ。狸。や。お。ほ。し。出。の。ふ
 さ。ま。へ。河。海。は。大。鏡。を。引。て。延。喜。の。大。井。の。行。幸。ハ。雅。明。親。王。七。歳
 よ。て。舞。ひ。せ。の。く。も。よ。あ。の。ち。の。光。る。や。う。よ。う。つ。く。く。と。い。は。せ。ら。れ。し
 ひ。の。う。ハ。山。神。の。め。で。く。と。り。な。り。ま。か。や。う。の。こ。と。を。も。て。ま。る。と。ん
 と。あり。女。房。如。て。源。を。山。神。の。め。で。く。取。り。な。れ。と。い。ふ。思。存。の。ふ。え。

源氏物語講義

おまのあ

三

○このたのきむ舞の
上の才二節はみ
のうけやさう
とある思慮之○四十
人のいしう上の垣
代とおれド○おれ
のかいさきおれ
のまゆ波を舞か
○いとあそろ
感賞のあまりあ
きこ○けおされた
源氏の容色は氣
おたふ○左大お
人系圖より源の
おのおの散
をてて菊をさ
へ左大おとつて
まべーかうやうの系
圖よりまき人名は外
もああり皆さあ

んるらひける。こぶあまふ舞のあげよ。四十人のあ
以志ろいひきく吹くそたる物のあともよあひた
る松風。まことのやまあろーとささく。あき
まよひ。いりりあふ木のをれをのよりあ
海波のうぐやきおるさ海いとおそろーまよ
でんゆ。うごーのお葉いさうちりささく。あまの
よほひよけおされあそちされを。あま
なるまきく^菊をりて左大おさーあふ一小段
第之。朱雀院へけきの空のさふん。あまよこたあまお
のうげよとあるい。上の才二節はみちのあげやさうぐ
ーとある。目くれあるほどよ。氣をたありうち
照るなり。

十九号九

りよ又返た人なれ
たり、
一才五節
空のけきも今日
おれの日をこと
りのあといあこ
りあや入綾入綾
樂の終りの手○か
のこーまーま
人何れあふね人
○山の木のあふ
おれたるさへ世は埋
もせしう人まど
いあこ○義秀殿
の所をらの四のこ
義秀殿は四注よ
もる。四のここと相
ま帝の内子源の才
○松風樂の名

志ぐれて。空のけきも今日
いさくまきく^{源の}のあまのあ
ドウモナラヌ
えるうぬをさうて。試樂よりハ又一段おれろさ手
くーたる。いりあやの秘。そらろさむく。は世の
と、わんささび。物ーもまー記志れ人な
ど。これゆと思おくれ。山の木のあふさう
おれさるさ人。まこーあふのいん志るハ。たまご
おもーけり。義秀殿の所をらの四のこことまど
さうハ。秋風^{あきかぜ}よまひあふるん。さうつたの
ん物わたりける。それらはおろろさあはさ^盡

源氏物語講義

おまのあ

六

盤渉調とあり○と
 ぶまーよやありらん
 源と四のよとの舞は
 よりて他のおかしら
 らびるれささき○
 正三位志のよ源後三
 位より正三位は叙せ
 られ一之○正下のか
 以中申後四位上
 なり正四位下も昇
 るふ○あんなちめ
 上達部へ三位以上
 の人をりよ○ひあ
 のよ源のあ世の
 一ききとん

二小才一節

よければ英華とどぐよめかうのらび。ありてをことざ
 浦一よやありらん。その夜源氏の申招。正三位志
 のよ。中申招正下のあひしきまふ。んだちめは
 りれさるべきまきり一階で昇進したる人のよろこびし孫ふも。源これ
 又よひあれしきまへるれを。人のめをもおどろあ
 し。心をよあこそをせ孫ふむ。の世ゆのしげ
 なる』一小段の才五節。朱雀院への幸の夜のさ満え
 是まてを一小段といひ。比叡を為。養試樂を足るふ
 とより。相養帝。朱雀院への幸あり。源氏。中申招。四
 の美羊の舞を徹覧あるま。源正三位志のよを叙せり。
 源正のままハそのころまので孫ひぬれを。まひのひまら
 や。源が。おほいと任事とてん
 大殿へ

十九号十

ふさきとん○あらし
 のよ源のあ世の
 よりてをるるれが
 殿の葵上方より修
 のつとん○二修院
 は人むさへまに葵上
 の方よりばよの上を
 ささきを知らるるれ
 よき女を迎へ入り
 るど人ののあを信
 て恨みのあ世○引
 ちくのありさ源家
 ふうちのあしきとん○
 さびとにささびハ心
 のまむむさひがけ
 有きでまらんがもど
 りよおれ源内侍
 有いの教とある伏
 案と○みはまほ

のよいさうとづれのよ。いさ。あの上のよ
 とう孫ひてを。二条院よは人むあへ
 りと人のあまをぬれを。いとんづきキニシハヌあるとね
 いさ。うちのありさ満は志り孫ふ。さむお
 ばさんまをとりなれど。ふうけい夫を慕ふ尋常の女
 夫を慕ふ尋常の女倒れ
 人のやうようらみの孫ひ。あむらう隔るる人たさう
 ちさうりてるぐさめまことさてん。かのを。葵の
 ちびよのまとう執成るゆのよ。はんはさきたさよ。さ
 るあるま。れまさびども。そくまを。人。葵
 の清ありさ浦のうらまよ。そのとれ十をちう
 十をちうああぬと

源氏物語講義

おまのあ

七

ちりの名の女房ハハク
 ちりあれむたが三人
 の女房とて入てある
 一〇けさやあてテキ
 ハキトハ表向きのハ
 てる一とどいさき
 〇兵アハ遠後つば
 のは兄弟の上の父之
 〇いと一あしあし
 源兵アハをんあふ
 兵アハハ由緒あるさ
 申うて一〇おとて
 人ハ源ハハお女よ
 兵アハをんあふと
 一〇おとて一むら
 兵アハハはあ父
 養の兄あれむあし
 一親一源のあふ
 一〇むら一あふと
 一源ハハ兵アハ

けさや 源ハハ ちりあれむたが三人
 の女房とて入てある
 一〇けさやあてテキ
 ハキトハ表向きのハ
 てる一とどいさき
 〇兵アハ遠後つば
 のは兄弟の上の父之
 〇いと一あしあし
 源兵アハをんあふ
 兵アハハ由緒あるさ
 申うて一〇おとて
 人ハ源ハハお女よ
 兵アハをんあふと
 一〇おとて一むら
 兵アハハはあ父
 養の兄あれむあし
 一親一源のあふ
 一〇むら一あふと
 一源ハハ兵アハ

十九号十三

の婿えられどさると
 を知りむらむらむら
 女であつて源をんあ
 やと好色のゆふら
 けと一〇くれぬれ
 一はあの内ハ入のあ
 ねあつて兵アハは
 名廉申ハハのあ一〇
 一のはあつて一〇
 養帝源のをんあ
 けと一〇おとて一
 やう一〇おとて一
 一〇おとて一〇お
 一〇おとて一〇お
 一〇おとて一〇お
 一〇おとて一〇お
 一〇おとて一〇お

てまつりのひで。むこよなどハおぼし
 女よてえなや。とりあめきたるはころよ
 けほひくれぬれむらむらむらむらむら
 やま一〇むら一〇むら一〇むら一〇むら
 けちかくく。人づつて 傳へ たらぞもの
 一を。こよ コノウヘナク たらぞもの
 けゆむぞ ヨギナイコトデアルコ たらぞもの
 けれど。一〇おとて一〇おとて一〇おと
 おこたり侍るを。さしむらむらむらむら
 け侍らんこそうれし。なごはむらむら

源氏物語講義

おとてのあ

十

○かゝるべきいふまゝ
 源のまげんをとりぬ
 ふん○ふたあまの
 おびふれ帯へ玉帯
 ふらめが〜きふ多
 一○あつあつ〜
 左大臣殿携参りて
 ちづり〜源のちりし
 ろへさせの〜○
 これハゆえんなど源
 今りのあまの過ちん
 内宴の時ハ用おんと
 之内宴といふ二三月の
 中ハ清涼殿まで文人
 召して宴會あつてを
 時ハ〜義経をそ
 けちん○それハ〜
 ち時ハ又別よ〜
 ち佑も〜○これハ
 た〜はひしと通

うらみぬらされて。うづきりちま〜
 のふは〜四月二日の事お孫ふ〜左大臣のぞき
 びひて。源の装束ぞ〜志の〜名ぶこのま
 おびもづ〜もたせて〜替へたまひて。
 ぞの内〜もきつ〜ひなま〜源相を
 らぬもありよ〜の〜とあをれりあれハ
 ちえんた〜といふ〜佑もする。やうのをりよ
 こそち〜とま〜色〜大玉相それをま〜れるも佑
 り。これハた〜めなれぬさ満るれをちん〜
 志ひて〜せめてま〜の〜地へがよ〜う川よあ

り人の飾り知らぬふ
 人として志ひて源よさ
 ませの〜○いけ
 のひあり左大臣殿を
 ち〜て地〜い〜
 ○た佑も〜も〜
 した〜で〜源を
 婿者といひて、出入さ
 せて〜は〜上なく
 うれ〜と〜
 三小才三節
 さんざ〜
 ちの事〜○内宴は内
 ハ桐葉帝〜
 雀院〜○一院桐葉帝
 の事親〜花も〜一院
 ハ寛平は皇〜
 ち〜とあり○福ひの
 ふ〜は〜女房達源
 の成人志の〜は〜

うづきた〜んま〜ふよいけ〜あひあ
 り。は〜よ〜か〜らんを〜
 えん。ま〜とあら〜。とん色〜三小段の
 養上のちんけ〜。兼よ左大臣殿を〜
 けら〜と恨〜の〜状を叙せり。さ〜は〜
 ぬむありよ〜。〜とあ〜
 んよハ。養のち〜。う〜家のあ〜。と思〜
 つきい〜とるみ〜。〜とあ〜
 よハ。〜と〜。〜と養上の内氣管をかきた
 あり〜の事〜の起らん伏案あり。さんざ〜
 ち。あ〜。あ〜ありき〜。内。ま。宮。一院を〜
 さ〜。養の三條の〜。や〜。ま〜。今
 女房詞
 ハ〜。〜。〜。福ひ孫〜。ゆ〜

そのん紀を辨らびて
まけてん○命をさぐ
かまはるはは序は
身うせむとおぼせ
ども、弘徽殿の呪咀
て死ぬるいと新りな
つるよの口をさ
よ、つらふかしてさあ
らんと思ふのん○
人まよ入せむをさ
時かよ入へん舞の
ふん○まのいさまり
てあまを源のつひ
て、まを清へ奉
せん○むつひの
げの初を女房の
侍してゐるまづ、
突ハむつひのげさ
かよあらば、源よ
く似たるを取ると

キラハゲマシテ
つよりてゐるん。やういささ
ける。帝のいづれか。つづ
るよの口をさ
心配シテ
ふむとてゐる人まよまわり
つらふかしてさあ
りて妻侍らん。とまよ
なる程なれどして。うせ
足なり。まよといとあま
源の容を
うつゝとつづるまよ。ま
まの心のおまろくまよ。人の

○飛心のあははよ
まことあるをい
旧はよ、引かあれど
あよおまよねえ○あ
やありつゝほづの
あやまち源は密通
したる過を○列の
まごつとらまはるま
がかりつゝまよ

三小ノ弟五節

いづれに源のつひよの
孫へん○かまのあ
ひあるまよまよあら
は、源のつひよのつひ
○今おのつひよ今よ
内裡へまよのつひよ
足のつひよまよ○
思へるまよまよ
よたむる源と命

るか。あやありつゝほづのあやま
くのおのひとがめ。やまらぬまよ
よまよまよとむまよ。い
りづづまよまよ。おぼ
ところろまよ。三小段の弟四節。二月十日あり。あ
まよ。とらまよのつひよ。命
よあひ孫ひて。まよまよまよ
ど。まよのあひあまよまよあらび。つひよのまよ
は、まよをとりまよ。おぼ
のつひよ。命のつひよ。あ
まよあらび。あまよのつひよ

のあは付てかえ○む
 ののひきまゝく眼目
 へ密通のよねるの胸
 中の安ういぬ○い
 じまてまじ帝あぢあ
 をりあせそあ○あ
 ○あまのいほまを
 ーそののい○あ
 ほどうい位の時あ
 よう○あまのい
 いあまのいひひひ
 て○あまのいほま
 じあははああまの
 と帝のあまのい○
 中あまのい源ハ赤
 面あまのい下ハ苦
 ーあまのい○あま
 ーあまのいあま
 てあまのいあま
 うあまのいあま

よいさき出さすまづせ給ひて。みさたち帝は病
 あまのいあまのい。あまのいあまのいあまのい
 りあまのいあまのい。あまのいあまのいあまのい
 あらん。あまのいあまのいあまのいあまのい
 どの。あまのいあまのいあまのいあまのい
 いあまのいあまのいあまのいあまのい
 申あまのいあまのいあまのいあまのい
 そろ。あまのいあまのいあまのいあまのい
 め。あまのいあまのいあまのいあまのい
 めのあまのいあまのいあまのいあまのい

二十号ハ

○あまのいあまのいあまのいあまのい
 ク○あまのいあまのいあまのいあまのい
 らんはあまのいあまのいあまのいあまのい
 らんはあまのいあまのいあまのいあまのい
 俗ムシヤウニ○あまのいあまのいあまのいあまのい
 のあまのいあまのいあまのいあまのい
 たあまのいあまのいあまのいあまのい
 あまのいあまのいあまのいあまのい
 あまのいあまのいあまのいあまのい
 のあまのいあまのいあまのいあまのい
 はあまのいあまのいあまのいあまのい
 てあまのいあまのいあまのいあまのい
 四小ノ才二第

中あまのいあまのいあまのいあまのい
 のあまのいあまのいあまのいあまのい
 はあまのいあまのいあまのいあまのい
 てあまのいあまのいあまのいあまのい
 四小段の才一第之。四月づありよあまのい
 とあまのいあまのいあまのいあまのい
 おまのい前裁のあまのいあまのいあまのい
 るあまのいあまのいあまのいあまのい

源氏物語講義

おまのいあ

二十

央國の年老たも跡
と○かりの下は引
あふおちあふきの森
のたまおねぬれを狗
もささめびのさへ
あふとふさのささ
引て源内侍自ら年老
たれを愛まへんまじ
と歎くさ○かりを
夏の引あふ咲花抄よ
ひまゆなくあがりよ
けりな大あらまきの森
こそ夏のあげいさのけ
れさ内侍を愛まへ
ぬる一と歎けどさ
あふひまゆなく男
のひひよるささ
○引こそこのさ
助字之源のゆああら
ばまよよりたれど

れど。由^ゆあり
さるあらび。かりのささ
きさ。ささ^{事モアラウニ}
あれ^{内侍の好色の心を深望止し思ふ}
りこそ夏の。とさゆめあとして。なまよくれと
のささ^{テアラズ}
きを女いさもあひ^{テアラズ}
ささ^{内侍}
ささ^{老きた}
うをめきたり。

けいさげんやまごめいりりさるる狗を

はふよまごのいんと
のささ○引ささげ
のさ上の木の下を
受てささげささ
ささい音立てゆあ
んごとのむささ
りつとささ男のさ
きてさゆささ
あ通ひさる他の男れ
邪魔よなまごのさ
くちれまごささ
ささささ○引さ
さささささ
あふ旧注の引あ
あふ拾遺よ拾遺
のかきさささ
あらの橋柱思ひさ
らよ中や流るんと

つめるさりれ本がくれ^{源内侍}
てあちささをささ^{内侍を引よめて}
うそ思ひまべらぬ。今ささ^{内侍はささささ}
んとさ。ささ^{キンドクと}
ひるがらぞやとて引をさちてりぞのあをせ^{内侍}
めておよびて。ささ^帝
うへいささささ^{上のさ尾のささ}
そのせのひたり。ささ^{源と内侍の年の似合ぬ}
といとをささささ^{障子}
はぬよめてささささ^{源内侍}

あまのこころとあまのこころ
 人つまのいふよきもほ
 るよきもやんつま
 あまのこころとあまのこころ
 之れとあまのこころ
 たり、まのこころとあまのこころ
 どうなるれ、あまのこころ
 別まのこころ
 五ノオ三節

あまのこころとあまのこころ
 人つまのいふよきもほ
 るよきもやんつま
 あまのこころとあまのこころ
 之れとあまのこころ
 たり、まのこころとあまのこころ
 どうなるれ、あまのこころ
 別まのこころ
 五ノオ三節

あまのこころとあまのこころ
 人つまのいふよきもほ
 るよきもやんつま
 あまのこころとあまのこころ
 之れとあまのこころ
 たり、まのこころとあまのこころ
 どうなるれ、あまのこころ
 別まのこころ
 五ノオ三節

あまのこころとあまのこころ
 人つまのいふよきもほ
 るよきもやんつま
 あまのこころとあまのこころ
 之れとあまのこころ
 たり、まのこころとあまのこころ
 どうなるれ、あまのこころ
 別まのこころ
 五ノオ三節

けさせのしをを綴合
のしそのれ端袖を
賜れぬ○この帯を
えざらばーあじ中
は端袖を取られつれ
ば帯だよなくいひ
よせんとほの思を
○なるも色むの
あじとわかつけ
帯の鉤といふ金具
かけたり、旧注よ
僅てふの石川のこ
うとよ帯を取られ
からさくははるい
る帯ぞもるるの帯
中いたえうとある
を取れり、さて中
帯ハニ藍方れどこ
ハ花田色といふ、さ
中ねと内估との中

所へ
おとさうより。これ中ねとちけけさうせ
とておつてみおせもる。いひでさう
つらん。心グルシキ
まーあむ。とおほき。そのりろれ。あみよつ
うて。
源
おのあむをあらむ。あやとあやうさよ
なるぞれおびをやうてあよびとてやう
。追付返あひ。
ふ立ちあひ。
中ね
あよかくおとられぬ。帯るれをかくさ
正ぬ。中とこのさ。えのぞれ。ちらと

廿一号八

あねまたえしとわ
あれんあ危くそ、帯
はとてぬえぬと
○あよかくのあ
も帯の縁強よつ
けたり、さハ中ね内
估をえよ引とられ
絶ててしとよと
つけんといふ○えの
れの「ド」わい
ては源ハ罪を遺れ
ふとハ中ねと
五小段
そらうへ云くは上へ
奏下へ云くは日
よて中ねハ人取な
れを○人すよさし
よつて人のえぬよ
中ね源のそをくより
て○立ちあひ

あり「五小段の身四節」源と中ねと帯とを袖とを
各段のふね。おを内估のよの餘波あり。さて
内估のりとておとされぬ。さまハ。帯木の巻の源と中
ねとの中ねのよをいふ。あよびくよて中ねつれ。えぬ
ふねとよ。おのつらう。こもるもおのむえ。とある文
脈あり。なほ次の巻
ふねあるをる。回しけておのく。教上よま
あり。源のさま
まき
ておをさす。源のえぬいとをのけれど。お
ほやけごとおほく。さうとさ。日よさ
のさま。キット。テ。正。シ。キ。サ。マ。と
とらる。さくさくよあれる。みさる。か。み
よ。ほ。急。ま。る。人。す。よ。さ。し。よ。つ。て。物。か。く
中ね源
さくさくひねらん。いとねらげな
クチラシゲ

源氏物語講義

お葉のあ

三十五

紅葉賀の巻終

廿一
号十三

